

Title	英国人のグランドツアー：その起源と歴史的発展
Sub Title	The grand tour for the British people : its origin and historical development
Author	小林, 麻衣子(Kobayashi, Maiko)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2010
Jtitle	Booklet Vol.18, (2010. ) ,p.36- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Cultural Tourism 2 : 一部図版削除
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000018-0036">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000018-0036</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 英国人のグランドツアー

## — その起源と歴史的発展

小林 麻衣子

### はじめに

近世英国<sup>★1</sup>の習慣として、貴族や裕福なジェントリ層の子弟の多くは、外国語を学び、一流の芸術や古代遺跡などの異文化に触れて教養を高め、洗練したマナーを身につけるという教育目的で、ヨーロッパ大陸に数カ月から数年ほどかけて滞在した。いわゆる「グランドツアー<sup>★2</sup>」として知られているヨーロッパ大陸の大周遊旅行である。グランドツアーの主な行き先は、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、オランダで、とりわけパリ、ヴェネチア、ローマは常に英国の人々で賑わっていた。17世紀以降の大陸旅行で特徴的だったのは、後世に名を残し、現代においても重要となる作品を執筆した者たちが、若き青年旅行者たちの旅先でのお目付け役、すなわち付き添い家庭教師として大陸旅行に同行する姿がよく見られたことである。例えば、『リヴァイアサン』の著者トマス・ホブズ(Thomas Hobbes, 1588-1679)は、第3代デヴォンシャー侯爵となるウィリアム・キャヴェンディッシュ(William Cavendish, 1617-84)の付き添い家庭教師として<sup>★3</sup>、近代哲学の父と称されるジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)は、裕福なロンドン商人の子息ケーレブ・バンクス(Caleb Banks, 1677-?)の付き添い家庭教師として<sup>★4</sup>、そして経済学の始祖と称されるアダム・スミス(Adam Smith, 1723-90)は第3代バクラー公爵(Henry Buccleuch, 1746-1812)の付き添い家庭教師として大陸旅行に同行した。そしてグランドツアーが最盛期を迎える18世紀には、哲学者ディヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-76)、そして英語辞典を編纂したことで有名なサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84)らのように、多くの知識人も自ら大陸旅行に出かけた。

近年の諸研究では、グランドツアーは特定の上流・中流階層による教育目的の旅だけを意味したのではなく、幅広い社会層による多様な目的のヨーロッパ大陸旅行であったことが指摘されている。しかしながら、既存の研究の多くは、16世紀にその起源を見出しながらも、17世紀後半から18

世紀までの貴族やジェントリ層の裕福な旅行者の経験について考察する傾向があった<sup>★5</sup>。そこで本稿では、18世紀に偏重していたグランドツアーの研究に対し、16世紀から18世紀までを対象として、継続と変容に着目しながら英国人のグランドツアーの歴史的発展について考察していく。

## 1. 大陸旅行の起源 — 16世紀後半から17世紀にかけて

巡礼の旅とは異なり、大陸の様々な都市を訪問し、異文化体験をしながら教養を深めることを目的とした「教育の旅」の起源は、英国の16世紀に見出される。古典古代への憧憬と復興運動を特徴とするルネサンスの思想的潮流が宮廷や大学において顕著となり、古典学問が政治的・社会的・文化的に重要性を増していった中、理想のジェントルマンになるためには、古典学問と異国文化の習得が必要不可欠であると宮廷社会で認識されていった。特に、海外における旅は政治的教育を提供するものとして奨励されていたのである。例えば、ヘンリ・ピーチャム (Henry Peacham, 1576?-1643) は、著作『完全なるジェントルマン』(1622年)の中で、理想のジェントルマン像の特徴を詳細に記し、その作品の最後の章では「旅行について」教示している。そこには「旅ほど、外国の諸事情に対してジェントルマンの判断が訂正され、確立されるものはなく、自らの知識について教示し、自国への愛情を確固とするものはない<sup>★6</sup>」と記されており、旅の教育効果が高く評価されている。また、フランシス・ベイコン (Francis Bacon, 1561-1626) の著作『随筆集』(1625年)の章「旅行に関して」では、「旅行は若い人には教育の一部となり、年配には経験の一部となる」点が指摘されている。旅先で見学し、観察すべきものとして、君主の宮廷、法廷、教会の宗教法廷、教会や修道院、その中に残存している記念碑、都市や町の城壁や要塞、船着き場や港、旧跡や廃墟、図書館、大学、討論会や講義、船舶や艦船、邸宅と庭園、近郊諸都市、武器庫、兵器庫、火薬庫、両替所、取引所、貯蔵所、馬術の練習、フェンシングや兵士の訓練、喜劇、宝石や衣装の宝庫、飾り棚や珍品などが列挙されている。ここには旅から得られる政治的教育のための着眼点が提示されているのである。ただし、ベイコンは、旅行者が訪問先の言語を学習していない場合には、旅に出る前に最初に学校に通って外国語を学習するようにと勧めている<sup>★7</sup>。

当時、大陸の旅から得られる政治的な教育は、その後のキャリアと連結することが多かった。フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney, 1554-86) は、オクスフォードのクライストチャーチで学び、エリザベス女王の宮廷で数カ月過ごした後、1572年から3年間大陸旅行へ出かけた。シドニーは、イタリア人の血をひく家庭教師、3名の召使い、そして四頭の馬と共にフランス、ドイツ、イタリア、オランダを旅し、外国語や外国の宮廷の流儀について学んで帰国した後、神聖ローマ皇帝兼ドイツ王ルドルフ2世のイングランド大使に任命された。

さらに、イングランドのエリザベス女王治世下では、大陸での経験が将

来、女王の海外における代理として務める際に大いに役に立つとして、宮廷側が若者に海外教育を受けさせるために金銭的支援をすることもあった。例えば、モリスン (Fynes Moryson, 1565/6-1630) は、ケンブリッジで勉強した後、大陸で法学を修めるために年間 20 ポンドの奨学金を受け、1591 年にロンドンを出発した。大陸旅行の経験をまとめて出版した彼の著作『旅程』(1617 年)によると、その後、彼は 4 年間ドイツ、プラハ、スイス、オランダを周遊した。しかしながら、政治情勢も不安定で交通網も十分発達していなかった当時の旅には、海賊、強盗、泥棒に出くわすなど多くの危険が伴っていた。モリスンは、大陸に渡る途中でダンケルクの海賊に遭遇しただけでなく、意図的に貧しい格好に変装していたにもかかわらずパリに行く途中強盗に遭い、隠していた金銭、刀剣、時計、シャツを奪われた\*8。こうした危険にもかかわらず、モリスン自身が「幼い頃から、親観ではなく経験によってのみ、耳や他の感覚ではなく目によってのみ、よく理解できるため、外国を見てみたい願望があった\*9」ように、16 世紀後半から 17 世紀にかけて多くの若者、特に貴族やジェントリ層の子弟たちが大陸旅行に出かけて行ったのである。

同時代には、旅の記録として日記あるいは旅行記が出版された。理想のジェントルマンになるための作法書として当時イングランドで人気のあったカスティリオーネ (Baldassare Castiglione, 1478-1529) の『宮廷人』を英訳したトマス・ホビィ (Sir Thomas Hoby, 1530-66) は、1547 年から 1564 年にかけて友人らと共にドイツ、イタリア、フランス、ベルギーを旅した。後に、彼はこの大陸旅行の記録を基にして旅のガイドブック『旅行書、トマス・ホビィの生活』を執筆し、訪問先の名所を詳細に紹介した\*10。

旅行日記以外に旅の思い出として、*Album Amicorum* と称される冊子に旅の記録を残すことも流行した。*Album Amicorum* とは、もともと 16 世紀中頃のドイツ中東部に位置するヴィッテンベルクの学生の間で流行した記録冊子に起源をもち\*11、ドイツ語では *Stammbücher*、ラテン語では *Album Amicorum*、英語では a book of friends と表記し、この用語は「友情の本」を意味する。*Album Amicorum* は、白紙のページを何十枚にもまとめて書物として装丁してから使用したもの、あるいは白紙に個別に記入してから最後にまとめて装丁したもののいずれかの形態をとっていた。こうした白紙冊子の所有者が、旅の途中の訪問先で知り合った友人、知人、著名人などに頼んで、白紙のページに彼らの署名を記入してもらったり、ラテン語やギリシア語などの言語を用いて道徳的・宗教的な格言などを記してもらったり、所有者へのメッセージを書いてもらった。記入されたページには書いた日付や場所も記されており、その冊子は、所有者がヨーロッパ各地を遍歴した際の「友情の記録」となった。このような「サイン帳」の慣習は、16・17 世紀にはブリテン島を含めヨーロッパの他の国々でも流行し、白紙冊子には装飾された紋章、訪問場所や記念碑のスケッチ、細密画なども描かれ、色彩があざやかなものもある\*12。

図 1 ©National Library of Scotland

図 2 ©National Library of Scotland

図 3 ©National Library of Scotland

図 4 ©National Library of Scotland

例えば、スコットランド人所有の「サイン帳」は、現在、4点の存在が確認されている。とりわけ1607年に初代バーリー・バルフォ卿 (Lord Balfour of Burleigh) となり、イングランド王ジェームズ1世治世下で外交使節の役割を担うこととなるマイケル・バルフォ (Michael Balfour) が所有していた「サイン帳」 (*Album Amicorum* of Sir Michael Balfour of Burleigh) は、当時の知的交流のみならず、文化的背景を理解するのにも有益な史料である★<sup>13</sup>。彼の「サイン帳」は、彼が1596年から1599年まで大陸旅行をした際の記録であり、そこには友人や知人、王家の人々などの署名だけでなく、イタリア都市の広場での公開処刑の様子 (図1)、ヴェネチアで有名なゴンドラの景色★<sup>14</sup> (図2、図3)、カーニヴァルの様子 (図4)、当時の特徴的な衣装を身にまとった女性 (図5) やヴェネチア総督の姿 (図6) などが色鮮やかに描かれている。このサイン帳に描かれている様々な衣装は、16世紀イタリアの画家チェーザレ・ヴェチェッリオ (Cesare Vecellio, 1521-1601) とヴェネチアで版画の出版に携わっていたジャコモ・フランコ (Giacomo Franco, 1550-1620) が作成した衣装挿絵の便覧『世界各地の古代及び現代の服装』 (1590年) に描かれている衣装と類似している★<sup>15</sup>。また、サイン帳の中の挿絵には、当時の治安状況を描いた絵もある。右側には黒い馬に乗っている男性が小銃を突き出し、左側には黒いマントを着た馬上の男性2人がお金の入った小袋を差し出しており、まさに強盗にお金を盗まれている場面である。おそらくこのような危険な場面も含め、「サイン帳」は旅行者にとって旅の貴重な思い出となったのであろう。

16世紀から17世紀前半にかけて、ジェントリ層の子弟たちが、個人で、あるいは友人たちと共に大陸旅行を経験する姿が多く見られた。この時代の大陸旅行は、彼らのキャリア形成に直接的に影響を及ぼす傾向があった。シドニーのように、ホビーとモリスンも大陸旅行に出かけた後、外国での経験を活かしてそれぞれフランス大使と政府役人となっている。当時、海外における旅は、旅行者にとってその後のキャリアに影響するほど教育的効果を持っていたといえよう。

図5 ©National Library of Scotland

図6 ©National Library of Scotland

## 2. 18世紀のグランドツアー——フランス編

18世紀のヨーロッパ大陸は幾度となく戦果に見舞われたが、同世紀に大陸旅行は全盛を極め、「グランドツアー」として定着した。大陸旅行参加者の傾向をみると、17世紀後半以降から、貴族やジェントリ、あるいは裕福な層の子弟と付き添い家庭教師のグループが目立つようになり、18世紀後半には下級ジェントリや文筆家の参加が多数を占めた。また、本場で研鑽を積むために芸術家、建築家、古物収集家も大陸旅行に出かけ、イタリアで自らのキャリアを形成する者もいた。このように、旅行者はますます多様化していったのである。

1720年代には旅程はほぼ定式化され、ロンドンから大陸へ渡る典型的なルートは、ドーヴァーとフランス北部の港町カレーを結ぶもので、18世紀後半には3時間で渡仏できる最短ルートであった。カレーにて関税を通過する様子を描いたウィリアム・ホガース (William Hogarth, 1697-1764) の絵《カレーの門》(Calais Gate, 1748年) (図7) は、当時の社会的・政治的な状況を風刺している。左奥に見えるスケッチを描いている人物がホガース本人で、その肩には逮捕の手が忍び寄っている。これはホガース自身仲間と共に大陸旅行に出発し、カレーに着いてからスパイ容疑で逮捕されたという経験をもとにして描かれたとされている。さらにその風刺画には、英国から肥えたローストビーフがカレーにある英国人用の宿屋へと運ばれて行く途中で、太ったフランス人の托鉢修道士や痩せこけたフランス兵士たちがそれを物欲しそうにじっと眺めている様子や、関税の館の外に1745/46年のジャコバイトの反乱★<sup>16</sup>に敗れた残党らしきスコットランド人がフランスへ逃れてきて今や座って物乞いをしている姿が特徴的である★<sup>17</sup>。

無事関税を通過した後、旅行者たちの多くはパリへと向かった。英国人にとってパリは洗練した社会、宮廷の中心、そして芸術の宝庫であり、グランドツアーの最初の目的地であった。途中、フランドル経由で遠回りしてダンケルク、リール、カンブレ、ドゥエ、トゥールネに立ち寄る者や、

図7 ©Tate, London 2009

アミアンやルーアンに立ち寄る者もいた。そこで旅行者たちは、ジャンヌ・ダルクの剣について修道僧から説明を受けたり、アミアンの教会に所蔵されている洗礼者ヨハネの頭部とされる品を鑑賞したり、ここに一月ほど滞在して修道僧からフランス語を学んだりした。

いざ一行がパリに到着すると、その入り口には鉄の門が据えられていた。旅行者は、最初に関税の館に行き、そこで一時的な従者を雇った。18世紀には大陸旅行の参加者も多様化し、上流貴族でない限り、当時、ホテルのような宿泊施設は高額であったため、家具付きの宿を探すのが常であった。旅行者の多くは、パリで部屋を借りて数週間から数か月ほど滞在した。夕食は外食が多く、旅行者は近代風のレストランではなく、普通のダイニングルームでセットメニューを食べた。フランスでの食事については、異なる見解も中にはあったが、カエルのフリカッセと不衛生な調理法を除いて、全般的に良質でバラエティーに富み美味しいと好評だった。ワインはブルゴーニュ産が最もよく飲まれた★<sup>18</sup>。

フランス語でミロードと呼ばれた英国からの若い旅行者たちは、パリでダンス・フェンシング・乗馬を習い、おしゃれな洋服を購入した。1640年代のピューリタン革命の際にフランスへ身を寄せていた、後に英国の王となるジェイムズ2世/7世の若かりし頃の思い出の品を鑑賞したり、サンジェルマンやサンクルー辺りを散歩したり、宮殿や公園などを散策した。コメディール・フランセーズは英国人に最も人気のある劇場であった。また彼らの定番の夜の娯楽場所は展望台であった。そこではパリの市街が一望でき、まさに当時のフランス王ルイ14世の治世の豪華絢爛を誇る場所でもあった。当時のフランスは、英国人にとって近代的な国に映ったのである。彼らは、ヴェルサイユ宮殿まで足を延ばし、英国の王室とは異なり、国王が宮廷で食事をとり、ミサへ参加し、狩猟するといった公開されている公的儀式に参加する様子を物珍しく眺めていたであろう。しかしながら、パリの生活は楽しいことだけではなかった。宿泊先のベッドにノミや南京虫が這っていることは日常茶飯事で、虫に刺されて眠れないこともしばしばあったと言われている。

パリでの滞在を終えると、旅行者たちは冬にはリヨンやマルセイユへ行き、その後、海でジェノヴァやリヴォルノあるいはジュネーヴへ行き、アルプス山脈を越えて最終目的地のイタリアへ向った。中には養生目的でモンペリエへ行く者、フランスの後にレイデンやユトレヒトで学ぶ者、ハノーヴァー、ベルリン、ドレスデン、プラハ、ウィーン、ミュンヘンへ赴く者もいた。当時は、荷馬車で旅をしたため、道の整備が行き届いていない場所や山脈を越えるには馬車の部品を分解し、運搬用ラバがかばんを運んだ。裕福な旅行者は、ガイドを雇い特別にあつらえた椅子に座り運んでもらうこともあった。



### 3. 18世紀のグランドツアー——イタリア編

ジョンソン博士が、「イタリアへ赴いたことのない男性は、見るべきものを見ていないため常に劣等感を感じることになる。旅の最大目的は地中海沿岸を見ることである★<sup>19</sup>」と語っていたように、イタリアはグランドツアーの最終目的地であった。

イタリアは、フランスとは対照的に、古代ローマの遺跡が豊富なため、歴史ある街・過去の街とみなされ、とりわけローマ、ヴェネチア、フィレンツェは訪問先として定番となっていた。旅行者は、そこで遺跡に触れ、ルネサンス期の芸術作品や建築を鑑賞し、ウェルギリウスやホラティウスなどの古典学問を学んだ。

イタリア内の旅程の一例として、フィレンツェ経由でナポリやピサを訪問した後、多くはローマへ直行し、そこに数か月から1・2年間滞在した。その後再びナポリへ行き、熱心な旅行者はシシリー島やギリシア、レヴァントへと足を伸ばし、そこから北上してヴェネチアに滞在する。ローマやヴェネチアでは、四旬節の前にはカーニヴァルが催されたので、その時期に合わせて旅程を組むことが勧められた。

旅行者の多くはポポロ門 (Porta del Popolo) を通ってローマ市内に入り、スペイン広場 (Piazza di Spagna) 付近に部屋を借り滞在した。彼らは召使いやガイドを雇い、古典彫刻や絵画、洋服、アクセサリーなどを購入した。イタリアの芸術作品は英国で大変価値があり、美術品を大量に購入して帰国する旅行者もいた。また当時、旅行者の間では、ローマでコロッセオなどの有名な遺跡を背景に自画像を描いてもらうことが定番となっており、特にバトーニ (Pompeo Batoni, 1708-1787) の作による肖像画が好まれた。ローマで芸術家やガイドの社交の場だったのが、コーヒーハウスである。スコットランドの画家ディヴィッド・アラン (David Allan, 1744-1796) が《ローマのコーヒー店》(A Roman coffee House, c.1775) (図8) という題で描いているように、スペイン広場のコーヒーハウスは、芸術家やガイドを含め英国人のたまり場として有名であった。名誉革命で追放された英国の王ジェイムズ2世/7世の子孫であるステュアート家の亡命宮廷が、1766年までローマにあったこともあり、ローマは英国人には馴染みのある場所でもあった★<sup>20</sup>。1750年から1790年までローマでの現金収入はかなりの割合で英国人がもたらしたといわれている。

人気のある訪問先のヴェネチアでは、旅行者は何よりも先に水の都の様子に感嘆した。(図9)は、フランチェスコ・グアルディ (Francesco Guardi, 1712-93) が描いた18世紀後半の《サンマルコ広場》(Piazza San Marco, c.1775) である。ヴェネチアで人気のある娯楽は、何ととってもカーニヴァルであった。人々は仮面をつけ、古風な衣装に身を包み街に繰り出し、アクロバットショー、レスリング大会、儀礼的行列など様々な見世物、音楽やダンスを楽しんだ。

イタリアでの芸術鑑賞として、ウフィッツィ美術館は非常に人気があっ

图 8 ©National Gallery of Scotland

图 9 ©National Gallery of Scotland

图 10 The Royal Collection ©2009,  
Her Majesty Queen Elizabeth II

た。旅行者はそこで、ラファエロ、ルーベンス、ホルバイン、レンブラントやミケランジェロなどの一流の芸術作品を一度に鑑賞することができた。ヨハン・ゾファニー (Johann Zoffany, 1733-1810) 作の《ウフィッツィ美術館のトリブーナ》(The Tribuna of the Uffizi, c1772-7) は、当時のグランドツアー一行の様子を描いている。右側前に星の勲章をつけた人物は、英国の公使としてフィレンツェに駐在していたホラス・マン (Horace/Horatio Mann, 1706-86) を表し、左側奥では画家のゾファニー自身が旅行者の肖像画を描いている (図 10)。

イタリアにはローマ時代の遺跡が多く残存していたため、ローマやヴェネチア以外の都市、特にナポリやヴェスヴィオ山も訪問先として人気があった。文学的かつ視覚的にも完璧な風景は、ローマから約 20 キロメートル離れたティヴォリであった。そこはハドリアヌス帝の別荘が発掘された場所である。

18 世紀の大陸旅行は教育効果をもたらしながらも、この時期になると、以前と比べてそれが旅行者のキャリアとの直接的な因果関係をもつことはさほどなかった。というのは、貴族や裕福なジェントリ層出身の場合、彼らは代々社会で支配的地位を占めていたため、大陸旅行に関係なく、彼らの統治機関における職は保障されていたからである。おそらくグランドツアーの直接的な恩恵を受けたグループは、付き添い家庭教師や文筆家などの専門職に携わっていた人達であったといえよう。冒頭で触れたが、付き添い家庭教師として大陸旅行に同行した者たちは、旅行の後に有名となる作品を執筆した。むしろ大陸旅行に参加したことにより、彼らは大陸の知識人と交流し最先端の学問に触れて大いなる刺激を受け、重要な作品となるものを執筆することができたと言った方が適切かもしれない。同時に、トバイアス・スモレット (Tobias George Smollett, 1721-71) らの文筆家たちは、大陸旅行から帰国した後、文学サークル内で彼らの名声を高めたと言われている。大陸旅行は、もはや若者のための学問修業の締めくくりだけでなく、様々な年齢層や職種にとっても効果をもたらしたのである。

#### 4. グランドツアーの危険性と批判

グランドツアーは参加者に多くの学びを提供した。しかし、そこには同時にさまざまな危険も潜んでいた。旅の途中で自然災害に出くわすことや馬車などの道中の事故はもちろんのこと、強盗や追い剥ぎに遭う危険、地中海沿岸では海賊に遭う危険などは旅行者の間ではよく知られていた。特に、16 世紀から 18 世紀にかけてローマからナポリまでの道中は危険な行程として有名であった。稀ではあるが、英国人の旅行者が殺害される事件も起きていた。1723 年 9 月にカレーから 7 マイル離れた場所で英国人旅行者 4 名が強盗に遭って殺害され、1735 年にはイタリアへ向けて出発した英国人旅行者がゲントで殺された★<sup>21</sup>。

さらに、大陸での戦争や紛争などの政治情勢も安全な旅行を妨げ、その

際、英国がどの国を支持するかによっても旅の安全は左右された。

しかしながら、大陸旅行をめぐって、いつの時代も最も危惧されていたのは、若者への道徳的及び宗教的な悪影響についてである。早くは16世紀後半に、ロジャー・アスカム (Roger Ascham, 1515/6-1568) が、著作『スクールマスター』(1570年)の中で、イタリアはかつて価値のある人間を育成するには最適の場所であったが、今となっては知恵や誠実さを養う場として若い男性には適していないとして、若者のイタリア旅行を批判している★<sup>22</sup>。1731年の『ジェントルマンズ・マガジン』の記事では、旅行者は「あらゆる形態において無節操になり、放蕩に陥り、そしてアイルランドのローマカトリック司祭やローマカトリック諸国に群がっている他の密使により、宗教的及び政治的な諸原則が墮落する★<sup>23</sup>」と、英国国教会とは異なる宗教的な誘惑に対しても懸念が表明されていた。

また、大陸旅行は年齢や時期によっては不適切であるとも指摘されていた。ジョン・ロックは、著作『教育に関する考察』(1693年)の中で、「海外旅行」を「教育における最後の部分」で「紳士の完成」を導くものと位置づけ、「言葉」の習得と、「異なった気質、習慣、生活方法の人たちとつきあって、知識と分別を向上させる」という意味では、大きな効果があることを認めつつも、16歳から21歳までは自分を律するだけの思慮も経験もないため最も適していない時期と主張する★<sup>24</sup>。同様な点は、ロックの著作刊行から約40年後の1737年に、『ジェントルマンズ・マガジン』の記事の中でも指摘され、早い段階で海外旅行をすることは効果的ではないと明示されている。その記事によると、海外旅行は「勤勉後の荒っぽさを徐々になくすために、そして学問的教養に洗練さを付加するために」行われるべきであり、教育期間の終盤になされるべきであると説いている★<sup>25</sup>。しかし、それが何歳を指すかは、ロックの理論とは異なり明確ではなかった。

多くの知識人が危惧したように、いつの時代でも大陸旅行中の若者の放蕩生活は、問題となっていた。英国国教会あるいは厳格なプロテスタント宗派が重視した節制や禁欲といった美徳の生活とは異なり、カトリック社会のフランスやイタリアでは英国からの監視が行き届かないため、旅行者は性的冒険の機会を得ることが多かった。特に若く健康で裕福な男性旅行者はこの種の危険に陥りやすかった。英国人の旅行者は酒と買春にほとんど全ての時間を費やしていると批判されることもあった。特に、パリは大都市のため人々の交流が盛んであること、また地元へのアクセスが比較的容易であったことから、旅行者にとって性的冒険の中心地となった。パリだけでなく、人気のあった訪問先ヴェネチアやローマも売春で悪名高かった。ジェイムズ・ボズウェル (James Boswell, 1740-95) のように、売春が認可されていたローマで売春宿の常連顧客となり、冒険が度を行き過ぎて、異国で性病になることは珍しくなく、中には死に至ることもあった。

他には、異国でのギャンブルによる浪費や借金も大きな問題となってい

た。近世ヨーロッパではギャンブルは人々の生活の一部として社会で受容されており、カードゲームのみならず政治・経済情報やスポーツなどあらゆることに対して賭けが行われていた。旅行中にギャンブルに耽り、大損害を被る英国人も出るなど、家族の財産を食いつぶす危険性もあった。特に、ヴェネチアのリドッティ (*ridotti/ridotto*) と呼ばれる賭博場は、客から賭博で金銭を巻き上げる場所として旅行者の間では悪名高かった。劇場が開幕する時期にリドッティも開館し、1つの階には10室から12室の賭博部屋があった。フランシス・マクシミリアン・ミッシン (Francis (Francois)-Maximilien Misson, c.1650-1722) は、付き添い家庭教師として同伴した大陸旅行の経験を基にして旅行ガイド『イタリアへの新たな旅』(1695年)を執筆し、その中でこの賭博場に注意を促すよう警告している★<sup>26</sup>。同様な点は、それから半世紀後に出版されたトマス・ニュージェント (Thomas Nugent, c1700-72) のガイドブック『グランドツアー』(1749年)でも指摘されている★<sup>27</sup>。このように、16世紀から18世紀に至っても大陸旅行に伴う危険は、宗教、性的放縦、そして賭博という点で共通していたのである。

## おわりに

大陸旅行者の平均年齢は16世紀後半には23歳だったのに対し、徐々に平均年齢は上昇し、19世紀半ばには42歳となった★<sup>28</sup>。同時に旅行者の訪問先の好みも変化した。タウナによると、大陸旅行における訪問先の傾向は1685-1720年、1776-1789年、1814-1817年という三つの時代区分に分けられる。第一の時代区分は、イタリアルネサンスの影響もあり、ルネサンス芸術や古代遺跡が豊富な場所が主要な目的地となっていた。18世紀後半になると「ロマンス主義運動」の潮流の影響を受け、ライン川やジュラ山脈、シャモニなど山間の風光明美な場所を経由して目的地へと向かうようになった。そして19世紀前半には、リヨン経由のルートよりもディジョン経由のルートの方が、ジュネーヴやアルプス山脈に近い人気となった。さらに、大陸旅行の目的地としてギリシアも加えられた。このような参加年齢や訪問先の変化には、旅行の主な担い手が貴族やジェントリ出身の若者から年配の知識人まで広がったこと等が要因として考えられる。18世紀後半の大陸旅行には、妻同伴や家族連れの中年男性の姿も多くなった。彼らの旅行目的は教育というよりはむしろ娯楽であり、中には健康目的の場合もあった。

一世を風靡したグランドツアーは、フランス革命やナポレオン戦争の影響により19世紀初めにはその勢いを失っていった。1820年代半ばまでにグランドツアーは復活したが、以前のような盛況にはならず、替わって列車旅行が流行した。蒸気機関車の実用化を含む工業化の進展により、ヨーロッパに鉄道が整備されると、旅はより多くの人たちが利用できるものへと変化し、中流階級の旅行者が目立つようになった。こうして教育的側面

を持っていた数年間にわたる大周遊旅行は、夏の数カ月間ほどの大陸における娯楽旅行へと変化していったのである。1841年にトマス・クック(Thomas Cook, 1808-92)が禁酒運動を広めるため鉄道旅行を組織した後、徐々に国内で団体旅行を拡充し、やがて海外における一般大衆向けの団体バックツアーに乗り出し好評を得て、大陸の旅はますます娯楽旅行として身近なものになっていった★<sup>29</sup>。

近年には、「グランドツアー」という語が再び脚光を浴びている。2005年にはナショナル・ジオグラフィック誌で『21世紀のグランドツアー』と題して特集が組まれ、飛行機を利用する世界一周旅行として80か所の訪問先が紹介されている。2006年には『安藤忠雄×旅——21世紀のグランドツアーは続いていく。』と題して世界中のユニークな建築や安藤氏が手掛けた建築が紹介され、読者をグランドツアーの旅へと案内している★<sup>30</sup>。2008年には、近世グランドツアーから現代にいたるまで、「グランドツアー」をキーワードにしてまとめた雑誌も発行された。近世英国で流行したヨーロッパ大周遊旅行は、数百年経た後、新たな形態で現代のツーリズムの中でよみがえっている。

## 註

- ☆1 — 1707年までイングランドとスコットランドはそれぞれ独立した国であり、グレートブリテン連合王国は存在しなかったが、本稿ではブリテン島全体を示す時に便宜的に「英国」と記す。特に2つの国の相違を強調したいときには、イングランド、スコットランドの表記を用いる。
- ☆2 — この用語は、リチャード・ラッセルズ(Richard Lassels, c.1603-1668)の旅行案内書『イタリア紀行』(1670年)に初出とされている。大陸旅行は、「騎士の修行の仕上げ」、そして若き学者による学問中心地への訪問を指す「ペレグリナティオ・アカデミア」という2つの伝統が融合してできた。エリック・リード、伊藤誓訳『旅の思想史』法政大学出版局、1993年、238-239頁。
- ☆3 — Lynda Levy Peck, 'Hobbes on the Grand Tour: Paris, Venice, or London?', *Journal of the History of Ideas*, 57 (1996), pp.177-183.
- ☆4 — John Lough (ed.), *Locke's Travels in France, 1675-1679* (New York, 1984).
- ☆5 — 近世の大陸旅行研究については以下を参照。Chloe Chard, *Pleasure and Guilt on the Grand Tour: Travel Writing and Imaginative Geography 1600-1830* (Manchester, 1999); John Towner, *An Historical Geography of Recreation and Tourism in the Western World 1540-1940* (Chichester, 1996); G. B. Parks, 'Travel as Education', in Richard Foster Jones et al. (eds.), *The Seventeenth Century* (Stanford, 1951); 木村俊道「文明・作法・大陸旅行——ジョン・ロックとシャフツベリの対話」『政治研究』(九州大学政治研究会)2005年、25-55頁。旅程を検討するのではなく、旅行者のイメージについて考察した研究は以下を参照。Sara Warneke, *Images of the Educational Traveller in Early Modern England* (Leiden, 1995)。18世紀の大陸旅行については以下を参照。Rosemary Sweet, *Antiquaries. The Discovery of the Past in Eighteenth-Century Britain* (London, 2004); Jeremy Black, *Italy and the Grand Tour* (New Haven & London, 2003); idem, *The Grand Tour in the Eighteenth Century* (Sutton, 1992); idem, *The British and the Grand Tour* (Beckenham, 1985); Christopher Hibbert, *The Grand Tour* (London, 1987); W. E. Mead, *The Grand Tour in*

*the Eighteenth Century* (New York, 1972); 京都府立大学旅ともてなしの比較文化研究会編『旅ともてなしの文化論』春風社、2008年; 本城靖久『グランド・ツアー——良き時代の良き旅』中公新書、1983年。17世紀については以下を参照。Edward Chaney, *The Grand Tour and the Great Rebellion: Richard Lassels and 'The Voyage of Italy' in the Seventeenth Century* (Geneva, 1985); Kenneth Charlton, *Education and Renaissance in England* (1965); John Stoye, *English Travellers Abroad, 1604-1667* (London, 1952); E. S. Bates, *Touring in 1600: A Study in the Development of Travel as a Means of Education* (Boston, 1911).

- ☆ 6 — Henry Peacham, *The Compleat Gentleman* (London, 1622), (Amsterdam and New York, 1968), p. 200.
- ☆ 7 — Francis Bacon, *Essays*, ed. Michael J. Hawkins (London, 1994), p. 47.
- ☆ 8 — Fynes Moryson, *An Itinerary* (1617) (Glasgow, 1907-8, 4 vols.), i, p. 399.
- ☆ 9 — Moryson, *An Itinerary*, i, p. 424.
- ☆ 10 — Thomas Hoby, *The Travels and Life of Sir Thomas Hoby, Kt of Bisham Abbey Written by Himself 1547-1564*, ed. E. Powell in *Camden Miscellany*, Third Series, 10, (London, 1902), pp. i-xxiv, 1-144.
- ☆ 11 — M. A. E. Nickson, *Early Autograph Albums in the British Museum* (London, 1970), p. 9.
- ☆ 12 — Max Rosenheim, 'The *Album Amicorum*', *Archaeologia*, 62 (1910), pp. 251-308.
- ☆ 13 — Iain Gordon Brown, 'Water, Windows, and Women: The Significance of Venice for Scots in *The Age of the Grand Tour*', *Eighteenth-Century Life*, 30, no. 3 (Duke University Press, 2006), pp. 1-50; idem, 'The *Album Amicorum* of Sir Michael Balfour', in Peter Humfrey et al (eds.), *The Age of Titian: Venetian Renaissance Art from Scottish Collections* (Edinburgh, 2004), p. 340; J. L. Nevinson, 'Illustrations of Costume in The *Alba Amicorum*', *Archaeologia*, 106 (1979), pp. 167-176; 小林麻衣子「Sir Michael Balfour of Burleighの手稿—*Album Amicorum* (1596)に関する一考察」『立教女学院短期大学紀要』第40号(2008)、2009年、89-98頁。
- ☆ 14 — 当時のゴンドラには船室があり、前後に船頭がいた。挿絵の中では、黒いゴンドラの船室の覆いがめくれるようになっており、覆いをめくると中に男女が接近して恋愛遊戯を楽しんでおり、その隣に目付け役のように女性が座っている。
- ☆ 15 — Brown, 'The *Album Amicorum*', p. 340; チェーザレ・ヴェチェッリオ著、ジャンニース・ゲラン・ダッレ・メーゼ監修、加藤なおみ訳『西洋ルネッサンスのファッションと生活』柏書房、2004年。
- ☆ 16 — ジャコバイトの反乱とは、名誉革命により王位を追われた英国の王ジェイムズ2世/7世の孫、若僧王と称されるチャールズ・エドワード・ステュアートが、王位の復権を狙って亡命先の大陸からスコットランドに上陸して英国政府側と交えた一連の戦いを意味する。最終的に若僧王は英国軍に敗れ、大陸に亡命する。
- ☆ 17 — 森洋子編『ホガースの銅版画——英国の世相と風刺』岩崎美術社、1987年、56頁。
- ☆ 18 — Thomas Nugent, *The Grand Tour* (1749) (London, 2004, 4 vols.), iv, p. 14; エドワード・リグビー、川分圭子訳『フランス革命を旅したイギリス人——リグビー博士の書簡より』春風社、2009年、36頁。
- ☆ 19 — James Boswell, *Life of Johnson*, ed. R. W. Chapman, rev. J. D. Fleeman, intro. Pat Rogers (1980, Oxford), p. 742.
- ☆ 20 — ヴァチカンにある教皇庁は、名誉革命により王位を追われた英国の王ジェイムズ2世/7世のステュアート家を公式な王家として認めていたため、英国はローマには公式な外交使節を配置していなかったが、1766年に息子の老僧王

のジェイムズ・フランシス・エドワード・ステュアートが亡くなると、教皇は若  
僭王チャールズ・エドワード・ステュアートのイギリス王家継承の正当性の主張  
を容認することはなかった。

- ☆21 — Black, *The British and the Grand Tour*, pp. 104-106.
- ☆22 — Roger Ascham, 'Schoolmaster, Book I', in *Whole Works of Roger Ascham*,  
ed. J. A. Giles (New York, 1965, 3 vols.), iii, pp. 148-149.
- ☆23 — *The Gentleman's Magazine*, 1, 'April 1731', p. 321.
- ☆24 — ロック、服部知文訳『教育に関する考察』岩波書店、1992年、327-332頁。
- ☆25 — *The Gentleman's Magazine*, 7, 'April 1737', pp. 220-222.
- ☆26 — 本稿では、第二版の1699年版を用いる。Francois-Maximilien Misson, *A  
New Voyage of Italy, with Curious Observations on Germany, Switzerland,  
Savoy, France, Flanders and Holland* (1691) (London, 1699, 2 vols.), i,  
pp. 201-202; ii, p. 342.
- ☆27 — Nugent, *The Grand Tour*, iii, pp. 90-1.
- ☆28 — John Towner, 'The European Grand Tour, c.1550-1840: A Study of its  
Role in the History of Tourism' (Unpublished PhD Thesis, University of Bir-  
mingham, 1984), p. 167.
- ☆29 — ピアーズ・ブレンドン、石井昭夫訳『トマス・クック物語——近代ツー  
リズムの創始者』中央公論社、1995年。
- ☆30 — 『21世紀のグランドツアー』日経ナショナルジオグラフィック社、2005  
年；『安藤忠雄×旅——21世紀のグランドツアーは続いていく。』マガジンハウ  
ス、2006年；Brainard, Gabrielle et al (eds.), *Grand Tour Respecta*, 41 (Massa-  
chusetts, 2008).

(こばやし まいこ・立教女学院短期大学英語科専任講師/  
近世スコットランド史・思想史)